東日本大震災…、千年に一度の大震災という。
今年ほど自然に翻弄された年はない…。

ふるさとの風
～霜月～

～天変地異～

常世の国 伊勢にも、天変地異があった－

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。
鴨長明の『方丈記』の冒頭の一節はあまりにも有名である。
その『方丈記』の中で、平安時代の終わりにさしかかる元歴２年（1185 年）、都を襲った大地震の悲惨な様子を詳細に述べている。

おびたたしく大地震ふること侍りき。そのさま世の常ならず、山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、巌割れて谷にまろび入る。…地の動き、家の破るる音、雷に異ならず。家の内にをれば忽にひしげなんとす。走り出づれば、地割れ裂く。羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや雲にも乗らむ。

『日本の古典をよむ１４（方丈記）』より

常世の国、伊勢の歴史にも幾許かの震災の爪痕が刻まれている。
古来「重浪帰する国」、「百船度会国」と謳われた伊勢の地。大湊は古くから、神宮御厨・御薗からの貢ものが運ばれる外港として、さらに商業海運の中心として繁栄してきた。湊とは、「水の門」という意味で、河海の水の出入口を意味する。宮川河口に形成された三角州に発達した大湊は絶えず津波の恐怖に苛まれてきた。
室町時代明応７年（1498 年）の大地震による大津波は、大湊の西部大塩屋村に全滅に近い打撃を与えたという。

明應七年八月廿五日大地震あり、海嘯を起して海邊の被害夥しく、大湊領鹽屋村の如き百八十余戸殆ど全滅して生き残ったもの僅に四五人であつたといふ。〔神宮大綱〕　『宇治山田市史』より

古くは神宮へ御塩を献上していた大塩屋村の塩田は壊滅、塩の神を祭る志宝屋神社の社殿も流失した。地元では、塩屋明神と親しまれている志宝屋神社の祭神は、塩土老翁、宮城県の塩竈六社明神の一座の御霊を祭ったと伝えられる。寛永 21 年（1644）に再興され、現在、海辺にのぞむ鎮守の森「鵜の森」にひっそりと鎮座する。

宝永４年（1707）10 月４日、大地震、大津波が襲い、大塩屋村は再び荒地となる。この時一筋の流れに過ぎなかった小川が、洪水の度に川幅が広くなり、現在、西の川とよばれている。

さらに享保十三年（1728）の暴風雨、高波、安政元年（1854）の大地震により、膨大な被害を被る。時の山田奉行二十代保科淡路守、四十代秋山安房守は、波除堤の修復等に尽力し、大湊の人々は、両奉行の偉業に深く感謝し、今日までその遺徳は伝えられている。

日保見山八幡宮の丘を越えたといわれた大津波…。今、その地に弥栄の松が、長い年月を経て堂々と枝を広げている。

「文明が進めば進むほど、災害はその劇烈の度を増す。」　寺田寅彦

太古の時代から、人間が災害に遭っては忘却するという事実は変わっていない。一方、四季折々の美に彩られるわが国の自然は少しも魅力を失せていない。歴史は静かにそれを語りかけている。

秋寂霜降…
伊勢の海よりはるか彼方、東北の海を偲ぶ…。

- 濱七郷　第三号　（勢田川惣印水門会／編　勢田川惣印水門会　L243／ハ／3）
- 伊勢大湊の今昔　（大西民一／著　大西民一　L243／オ）

図書館だより
2011年11月号より